



発行責任者 病院長 岡野友宏
編集責任者 広報委員長 高橋浩二

〒145-8515 東京都大田区北千束2-1-1 TEL 03-3787-1151

ホームページ: <http://www.senzoku.showa-u.ac.jp/>

患者さんにやさしく、低侵襲な、よりよい治療をめざして

口腔外科・科長 新谷 悟



私どもの担当する口腔外科は、顎口腔領域に発生する様々な疾患の治療に携わる診療科です。「口の外科」と聞くと「口の中を切ったり貼ったりする怖い診療科」と思われがちで、歯科の中でも、患者さんにとっては一番嫌な診療科かも知れません。

実際に、我々の診療科では、歯を抜いたり、顎の中に出来る袋のような病気を口の中のできものを取ったり、顎の骨折を手術したりと、あまり、患者さんが受けたくない診療を担当しています。ですが、歯が原因で膿んで、熱が出て、ご飯も食べられない状態であれば、その原因である歯を取り除かないといけませんし、顎が折れたままでは、話すことも食べることも出来ませんので、骨折を治す手術が必要となります。また、口の中にも良性腫瘍や悪性腫瘍(口腔癌(こうくうがん))が出来たりもしますので、そのために治療が必要となります。これらの治療は、患者さんの口の中の病気を治し、よりよい生活を送ってもらうために必要な手術なのです。



硬性内視鏡と内視鏡による手術: 口腔内よりの小さい切開で手術が可能になり、低侵襲により術後の回復も早い。上顎洞の手術にも応用している。

我々は現在の医学(歯科医学)における新しい技術を取り入れており、患者さんの負担を減らす努力をしております。歯を抜くときに、怖い人には、歯科麻酔の先生と相談して気持ちが落ち着く様な状態にし、怖い思いをすることなく歯を抜きます。顎の中の病巣を取るときや骨折の治療時に、内視鏡を用いた手術によ

て、口の中からの小さい傷で治療が出来るようになっていきます。骨折した時に折れた部分を、固定する板も、金属性から体の中で時間が経つと溶けていく吸収性の人工素材を使ったものを使い、固定のための板をとるための手術を回避しています。



吸収性プレート: 骨折などの手術に使用する。金属プレートと違い除去手術を必用としないため、患者さんの負担が少ない。

この様に、「いかに患者さんに負担の少ない低侵襲な治療ができるのか」を考え続けています。そして、患者さんが安心して治療を受けていただけるように、十分に理解していただける様な治療の説明を心がけています。

これからも、患者さんにやさしく、低侵襲な、よりよい治療を目指していきます。

ご理解とご支援を、引き続き、よろしくお願い申し上げます。



「口内炎」の記事が紹介されました。

(日本経済新聞 2008年8月5日版に掲載)

口腔外科 紹介

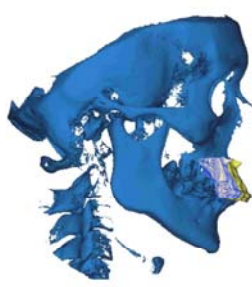
口腔外科では、新谷教授の専門である「口腔癌(こうくうがん)」に対する治療を始め、親知らずなどの抜歯、顎や口の中にできる腫瘍(できもの)や嚢胞(のうほう:袋の様な病変)、顔の外傷や顎の骨折、うけ口や顎が曲がっている(非対称)といった方に対する顎矯正手術、さらに骨がないなどの理由でインプラント治療が受けられない方に骨を造り、そこに埋入するインプラント手術などの外科的処置を行っています。その他、口の中が乾く、味がおかしい、口内炎がなおらない、口の粘膜にただれや潰瘍(かいよう)ができたなどの口腔粘膜疾患に対しての薬物治療(漢方なども含む)も行っています。



外来での治療風景

患者さんにやさしい治療を提供することをモットーに、口腔癌治療では、サイバーナイフ(副作用の少ない最新の放射線治療)や効果のある抗がん剤を適切に選ぶための抗がん剤感受性試験、さらに癌免疫療法も駆使してできるだけ口腔の話す、たべる、のむといった機能を損なわない治療を行っています。その一部は昭和大口腔外科方式として広く報道されております。

また、顎の変形を治す顎矯正手術やインプラント治療において骨の量などが少ない、いわゆる難症例に対しては術前に患者さん個々の顎の骨の状態を三次元画像として三次元模型を作製することでシミュレーションする手術支援システムを導入しており、関連学会でも高い評価をうけています。



三次元画像による手術シミュレーション

さらに、骨折の手術や顎の中の、病変を摘出する手術において内視鏡を用い、顔やくびに傷をつけずに口の中からの小さな切開で手術をする硬性内視鏡手術も、全国に先がけて導入し、患者さんの高い満足度を得ています。

その他、近隣歯科医師会と連携しての「口腔がん検診」や歯科病院での「無料口腔がん相談」などを導いて社会にも貢献しており、さらに進めたいと思っております。

患者さんのためのよりよい治療のための研究として、口腔癌早期発見のための腫瘍マーカーの探索(東大、UCLAとの共同研究)、骨造成のための人工材料の開発など(九州大、トロント大との共同研究)も行っております。

ますますのご理解と、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

(科長 新谷 悟)



事故で歯を強く打った時や硬い物を咬んだ時などに歯が破折します。破折した歯の状態により破折した部位の補修だけで済む場合、歯の中の治療が必要となる場合、破折した歯の一部を除去してその他の歯を残す場合、止むを得ず抜歯を余儀なくされる場合もあります。私達の教室では抜歯される事が多かった垂直に破折した奥歯を抜かないで残す研究を行って来ました。その結果、成功率の高い方法が開発されて来ましたので御紹介します(図1)。

臨床症例の解説

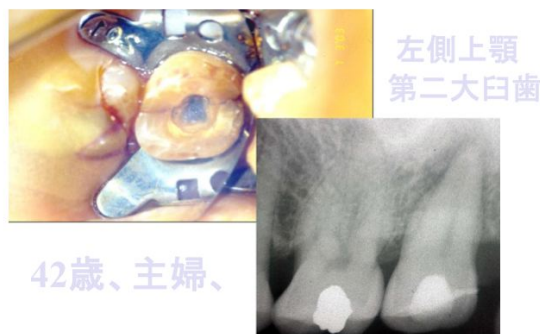


図1 来院時の所見

1. 垂直に破折した全ての歯を残すことは出来ません。歯の大方が残っている場合だけです。
2. 最初に歯の中の治療を行います。治療の結果、歯の中の治療が成功した歯だけが残せます。エックス線写真を撮影して最終確認をします(図2)。
3. 歯の頬舌側面に将来冠を被せるためのスペースとなる窩洞を掘りそこから歯の中に小さな孔を4カ所開けます。
4. 歯列矯正時に使用する細いステンレスのワイヤーを用いて先程あけた孔から歯の内側に向かって通し歯の内側で結びます。
5. 歯の内部の破折したところを確認後接着剤外科用アロンアルファーを流し込みます。接着性のレジンでも良いと思います。
6. 必要に応じてピン等を用いて根管と歯冠部を保持します。
7. 冠を形成し、型を取り、冠を入れて経過を観察します(図3)。
8. エックス線写真などで定期的に経過を観察します(図2)。
9. 3年以上臨床的に問題が無ければ成功例となります(図2)。
10. 歯を長い間健康な状態で使用する為にはどのような歯の治療を行った場合でも、歯の周囲を毎食後徹底的に清掃する必要があります。

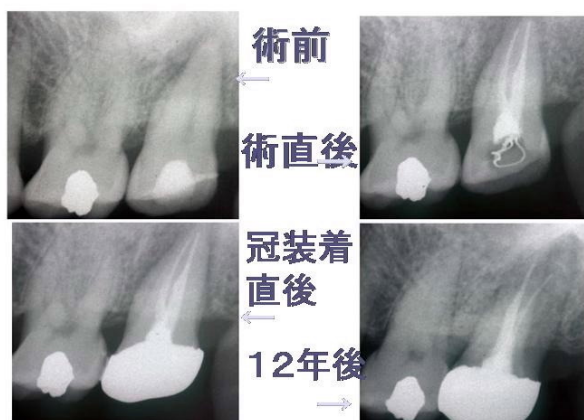


図2 十二年後までのエックス線写真



Nd:YAGレーザーとフッ化アンモニア銀を併用して歯質を強化した

図3 冠の製作と装着

障害者歯科 紹介

障害者歯科は2004年に4階小児歯科外来の一画に開設され、障害のため一般の歯科医院をご利用になりにくい患者様の治療や予防、定期健診をおこなっています。歯の治療は誰しも怖い気持ちや不安を感じるものです。特に発達障害のお子様や知的障害や体にご不自由のある方、そしてそのご家族の方は、お口の中に虫歯や気になる所があっても、うまく実際の治療が受けられるかどうかご心配になられることもあるかと思えます。当科では患者様それぞれの状況をご本人やご家族と相談しながら、その方に最も適した診療方法や治療内容を選択するように心がけております。さらに大学病院の特徴を活かし、より専門的な治療が必要な場合には歯周病科、補綴科、口腔外科などの専門各科と積極的な連携を図ることでより良い医療を提供できるよう努めております。

また、治療時の体動が大きく安全な外来治療が難しい場合には、麻酔科の連携により鎮静作用のあるお薬を点滴で流す事によって恐怖や不安を軽減する静脈内鎮静法や集中的にまとめて治療を行う全身麻酔下治療もおこなっております。このような特殊な方法を用いる場合には、麻酔医による術前の検査が必要となりますのでご相談下さい。



お口の健康は体の健康の基本です。私達は患者様の障害やお口の状況に合わせたケアや予防法などアドバイスできるよう努力してまいりますので、何かございましたらお気軽にご相談、ご利用下さい。

尚、できるだけ来院時のお待ち頂く時間を短くできますように、受診の際は予め日時のご予約をおとり頂きます様お願い申し上げます。

(科長 佐藤 昌史)



全身麻酔下での治療風景



口腔衛生指導の風景

お知らせ

昨年11月8日に行われた健口フェスティバルでのバザーや出店の売上金67,661円を大田区の福祉関係に寄付させていただきました。平成21年2月1日号No.1195の「おおた区報」に、社会福祉のためのあたたかい善意として、昭和大学歯科病院からのこの寄付が掲載されました。

編集後記

「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」の講演会に出席して感じたこと

医療現場では「インフォームドコンセント(十分な説明と同意)」が非常に重要ですが、この言葉の意味を患者さんに説明にする際に①まずこれだけは②少し詳しく③時間をかけてじっくりと3種類もあるそうです。(詳細は独立行政法人国立国語研究所のホームページをご覧ください)

また、医療者同士では「IC」と略称を使用していますので、日本語・英語・略語と使われている言葉も3種類ある訳です。これだけ病院内で使われる言葉が複雑であれば、本当に「意味」までちゃんと理解して使っているのか心配になりますし、患者さんが誤解している可能性もあります。病院に勤める者として「院内に氾濫する医療用語を何とかせんといかん！」と思いました。

(K.A記)

(管理課)

